

聖書：使徒言行録2章1節-13節

『五旬祭の日に』

120人ほどのキリストの弟子たちは、キリストが昇天し、自分たちのもとを離れていった後、自分たちに語られたキリストの言葉に踏みとどまっていた。「あなた方の上に聖霊が降ると、あなた方力を受ける。そして、地の果てまでわたしの証人となる」。弟子たちは皆で一つとなって祈っていました。

そこには主イエスの母マリアも、マティアを加えた12弟子も、皆いました。

五旬祭の日のことです。五旬祭というのは、ユダヤの三大祭りの一つで収穫の祭でした。過越の祭から50日目ということで、ペンテコステ（50日目）と呼ばれていました。そこで不思議なことが起こりました。

突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、家じゅうに響き、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。そして一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話し出した、というのです。

おそらく多くの人がここを読んで、わからない、という感じを持つだろうと思います。一つにはわたしたちの経験の中にあることだからです。これと同じ形で聖霊経験を自分はしていないし、想像が及ばない、というようなわかりにくさです。

それは逆に言うと、自分の経験や知識で受け止められる、理解できると感じた聖書の言葉を、わたしたちは「わかる」、と捉えがちだ、ということです。

しかし、わかることばかりに気を取られていると、聖書が語ろうとすることを自分の経験や知性の中に押し込めていくようなことばかりしてしまうことにもなりかねません。聖書が語ろうとしていることが、そもそもわたしの経験の中にあるという保証はどこにもないし、まして、わたしたちの貧しい知性の枠の中に押し込められるとは、とても思えないのです。とすれば、聖書を読んでわからない箇所に出会ったら、自分の経験や知性を越えた出来事、語りかけに出会っているのだ、という謙虚さを持つことが大事なのです。わからないからダメ、というようなことではなく、わからないことの前に立ち続けていくことを大切にしつつ、神の働きの大きさを信じて聞く、ということが大事になるのです。

さて、それにしても、わたしたちは聖霊ということについて、疎い。神とイエス・キリストについては、わたしたちは何ほどこ知っているし、何ほどこかの

ことを語ろうと思えば語ります。しかし聖霊となると口が重い。という人も少なくないでしょう。また逆に、聖霊とか霊の働きを人間の精神的な働きのようにとらえて、わかろうとする人たちもいます。

聖書が語っている聖霊とは、まず、わたしたちの中にあるものではない。わたしの精神性から生み出されてくるものではない。外からやってくるものです。

激しい風が吹いてくるような大きな音と、炎のような舌、そしてそれが一人一人の上にとどまり、聖霊に満たされていく。それは聖霊がわたしたちの中にあるものでなく、あくまでも外からやってくるものであることを物語っています。

しかも一人一人の上にとどまったというのですから、聖霊は一人一人に降り、それにより、聖霊に満たされ一人一人は語りだした、と聖書は言います。いろいろな国の言葉で語り始めたのです。何を語り始めたかと言えば、11節にある「神の偉大な業」を語り始めた。エルサレムの町には、いろいろな国に住むユダヤ人ディアスポラのユダヤ人が祭りのためにやってきていました。この人たちに聖霊を受けた弟子たちは語り始めていきました。それもいろいろな国の言語で語り始めた。

外国に住んでいるユダヤ人のそれぞれの国の言葉で語った。相手に届く言葉で弟子たちが語り始めたということです。

聖霊を受けてわたしが豊かなものになるとか、精神性が深められていくとか、そんなことは語られていない。語るものになる、のです。そしてそれはキリストを証しする、ということに向かう霊なのです。

聞いていた者たちは「わたしたちはいろいろな国からここに集まっているというのに、自分たちの国の言語で神の偉大な業を語るのを聞こうとは」と言って驚き怪しんだ。聖霊を受けた120人ほどの弟子たちは、皆それぞれ、神の偉大な業を語った。イエス・キリストを語った。弟子たちは自分たちの知識や、勉強の成果や体験談を披露したわけではなかった。人々が驚き怪しんだ、ということはもちろん弟子たちが多言語で語りだしたのだからでしょう。しかも、一人一人が自分のことではなく神のことを語りだしたので、驚いた。同時に、怪しんだのです。こいつらやばいんじゃないか、頭おかしいのではないかと。

かつて弟子たちは、主イエスに向かって、あなたが王座に就いた時、わたしを右に座らせてください、と言っていた。あるいは、わたしはご一緒なら牢に入っても死んでもいいと言って、自分を誇示していた。つまり弟子たちは自分のことを言っていた。自分のうちにあることを語っていた。自分自慢だったり自分アピールだったり。だが弟子たちは聖霊を受けて、自分のことではない、

神の偉大な業を語り始めた。ここに何があったのか。何が起きているのか。

弟子たちに起こったこと、それは弟子たちが自分について、自分を語ることよりも大事なものと出会った、ということです。人間はいつも自分のことに関心があり、自分のことを語るのです。家族のことも仕事のことも、つまるところ自分なのです。だが120人の弟子たちはここで、自分を語るのではなく、自分より大事なものを語り始めるのです。それは話しているのは弟子なのですが、話をする主体、話させているのが自分ではない、というような経験です。それはと譬えて言えば、東日本大震災の救援活動に長く携わった人が、被災地を語るという場合、語るのはその人だけれど、その人を語らせているのは、被災地の人たち、被災地の出来事、現実だ、ということがあります。自分を語るのではない。語らせようとするものがあってそれに突き動かされていく、ということです。

聖霊によって語りだしたことは、そこに居合わせた人たちを納得させたわけでも、理解を得たわけでもなかった。中にはあいつらは酒に酔って、頓珍漢なことを言っているのだ、と嘲った者もいたのです。しかし、弟子たちは語らなければならぬことを語った、ということです。

ここで弟子たちが語り始めたこと、そこにキリスト教会の始まりがあります。教会はこの世界に対して、語らなければならぬことを語る群れなのです。

もう一つ、ここでわたしたちが受け取っておくべきことがあります。それは多くの人が言うことですが、自分には聖霊を受けているという実感がなく、使徒言行録が語るような経験が自分にはない、ということに関してです。

パウロは手紙の中で、「わたしは自分というものがわからない。自分が望んでいるよいことは実行せず、自分が憎んでいるような悪をするからだ。」という意味のことを言いました。例えば、自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさいという言葉聞いて、そうだ、本当にその通りだ、と思い実行したいと願うのだけれど、気がつくと、自分を愛するようになど隣人を愛してはいない。結局自分本位に生きて、隣人のことがどこかにいってしまう、というようなことです。力を尽くし、精神を尽くし思いを尽くしてあなたの主なる神を愛せよ、と言われて、深く頷きながらも、自分の生活は、神を愛することではなく自分を愛することに終始してしまう。だからパウロはこういう。「わたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。」

おそらくパウロの中では、良いこととは何か、悪いことはなにかも知っては

いる。知ってはいるのだけれど、そのように生きられない。努力が足りない、ということもあるのだろう。だが、努力で何とかなるのか。自分は、悪魔のような存在に絶えず誘惑されていて、気がつかないうちにその誘惑にいつも負けているのではないか。

悪霊の働きの中に自分は置かれている。悪霊の働きに振り回され、自分本位な生き方へと引きずり込まれている。だが問題は、悪霊に振り回されている、という実感すらないことだ。つまり、わたしたちは悪霊の働きに対しても、現実的には、鈍感。実感が伴っているとは多くの場合言い難い。

なぜ、今ここで悪霊の話を持ち出したか。わたしたちの実感はあてにはならない、ということを知るためです。聖霊を受けている、という実感がなく、明確な聖霊体験の実感がなく、という声は確かによく聞くのですが、わたしたちの実感がそれほど確かなものなのか。実感を否定するものではないし、実感は大事なものでもあります。しかし、わたしたちは神を信じるのであって、自分の実感を信じて信仰の歩みをなすのではない。

最初に言ったわかるわからない、ということもしばしばこの実感と結びついていることが多い。むしろわたしたちは、実感にとらわれることなく、聖霊がこの世界に与えられたという聖書の語る事実に向け、わたしの上にも聖霊がとどまっていることを受けていきたい。神の偉大な業、イエス・キリストを証しすること、わたし自身ではなく、キリストを語ることへと召し出されていることを受けとめていく必要がある。

今この世界で23億の人がキリスト教徒だと言われています。そして世界中に教会があり、その教会が神のみ言葉を宣べ伝え、神を礼拝している。教会が神の偉大な業を宣べ伝え、キリストを信じる一人一人が主の証人として歩み続けている。それはこの世界に聖霊が豊かに働き続けている、ということです。教会は生まれてからずっと、今日に至るまで、聖霊の働きの中にあります。一人一人も聖霊の働きの中にあります。どれほど悪霊が働く世界であっても、そのただ中に聖霊はさらに豊かな力で働いてくださっています。そのことを信じて受け止めて、今日を歩んでいきましょう。